

まほろばトリップ

時のむこう、飛鳥

Alicekan

倉本由布



箱の中に、翡翠ひすいがあった。

すっかり忘れ去られ、しまいこまれていた箱だ。

そこに収められている三つの翡翠が、ばんやりと輪郭りんかくをなくし始めていた。ゆつくりと、ゆつくりと時間をかけて、翡翠の輪郭は溶け、やがてその姿を消した。

Alice kan

もくじ

プロローグ

第一章 飛鳥の都の真秀^{まほ}

第二章 タケルとタケルとタケル

第三章 みんなひとりぼっち

第四章 また選^{かえ}る

エピローグ

あとがき

Alicekan

8

14

64

126

174

234

246

まほろばトリップ

時のむこう、飛鳥

倉本由布

AliceKan



中学二年生になる前の春休み。真秀は明日香村に遊びに来ていた。

奈良県高市郡明日香村——まわりを山々に囲まれた小さな盆地にある、のどかな村だ。真秀のおじいちゃん一族は、いつからなのかを誰も覚えていないほど長い間、この村に住んでいる。

真秀の家は、東京の、新宿から電車で十五分の住宅街にある。奈良県まではとても遠いのもあって、今まで、こちらには両親と一緒にしか来たことがなかった。でも、もう中二になるのだし大丈夫と、今回はひとりでやって来たのだ。

明日香村には、大昔の都が置かれていたという。どれくらいの前かというところ、
『千五百年くらい前になるかな。飛鳥時代というんだ』
おじいちゃんが教えてくれた。



『千五百年!』

そのとき声を上げて興味を示したのは、真秀の、ふたつ年上のお兄ちゃん。真秀はまだ幼かったので、千五百という数字も飛鳥時代という言葉も、実際には後になって覚えたものだ。でも、千五百年前という想像もつかないほどの大昔の話に目を輝かせていたお兄ちゃんの姿は、今でも記憶に残っている。

おじいちゃんは日本史にくわしくて、たくさん本を読んでいる。そのおじいちゃんに似たのか、お兄ちゃんも、歴史だけでなくいろんなことに興味を持ち、本を読むのが好きな子だった。

真秀はお兄ちゃんが大好きで、毎日、お兄ちゃんのとをついて回っていた。邪魔に思うときもあつたらうに、お兄ちゃんはいつだって、やさしく真秀の面倒をみてくれた。

でも七年前、八歳だったお兄ちゃんは、明日香村で行方不明になった——。

この春、真秀は、どうしてもやりたいことがあって、ここにやって来たのだ。それは、お兄ちゃんのゆくえにつながる新しい手がかりがないか、さがしてみたい、ということ。

この丘は、お兄ちゃんがいなくなった現場かもしれないと言われていた場所なのだ。

当時、大勢で捜索されても何もわからなかったのだから、真秀のような子どもに何
が出来たわけもない——両親にはそう言われるけれど、真秀はなぜか、前からずつと
この丘が気になって仕方なかった。

ここからは、村の景色が広く遠く、見渡せる。

眼下は畑。その中に、ぼつぼつと近所の家々の瓦屋根。真正面に見える、こんもり
とした緑のかたまりは、古代の権力者・蘇我氏の住まいがあつた甘檜丘。すぐそばを
県道が通っていて、車の走ってゆく様子もなんだが、のんびりとのどかに見える。

真秀は今日、はじめてこの丘にのぼつた。

今まで来られなかったのは、ここが私有地で、勝手に入りこむわけにはいかなかった
からというのが一番の理由だ。でも中学に上がつて少し大人に近づいた真秀は、思
いついたのだ。おじいちゃんに頼んで、所有者の人にお願ひしてもらえばいい。

そして無事、許可をもらえて、期待と緊張で胸がいつぱいになりながら、のぼつて
来たのだつた。

*

真秀はひとり、雑草だらけの斜面を踏みしめ、一番高い場所を目指す。

ふと、辺りがあまりにも静かなことに気がついた。

耳を澄ませながら周囲を見まわそうとしたときだ。足もとで何か光った気がして、
真秀はそちらへ目を向けた。

草むらの中に、緑色の石が落ちている。光つたのは、その石だ。

「わあ、きれい！」

歓声をあげ、拾い上げる。

半透明の、ミルク色がかつた緑の石。ところどころにピンクも混じる、不思議な色
合い。左のてのひらにのせると、ちょうど真ん中のくぼみにおさまるくらいの大きさ
だつた。

しつぽの上がつたおたまじゃくしのような形の石。おたまじゃくしの頭の部分に、
ちいさな穴が開いている。

てのひらに乗せてすぐ、真秀は、

「あれ？」

とつぶやいた。不思議なことに、石は、みずから光を放っているようなのだ。

最初はふんわりした輝きだつた。ところが、あつという間に勢いが増し、石の真ん

中から噴き出してくるほどになった。

「なに、これ……」

真秀を取り巻く空気が、ぴりつとふるえた。静寂が深まってゆく。ふわりと意識が浮き上がる。

やがて、ふうつと足もとが頼りなくなった。それと共に、石からあふれる光が一本の柱となり、天へと真つすぐに伸びてゆく。

真秀は、ぼうぜんと柱を見上げた。

これは何？ いったい何が起こっているのだろう。

気づけば真秀の周りはミルク色がかつた緑のもやに取り巻かれ、他には何も見えなくなっている。

すると、天から声が降ってきた。女の人の声だ。

——タケル、戻って来るのよ、戻って来なさい。

それは真秀自身の体の中から出てくる声でもあった。

——丈瑠お兄ちゃん、戻って来て。どこにいるの、戻って来て。

ふたつの声はからみ合い、溶け合って、やがて言葉の形をなくしてゆく。そして、せわしなく鳴る鐘の音のように耳の中で暴れはじめた。

緑のもやからなんとか抜け出そうと、手足をバタつかせて暴れてみてもどうにもならない。

女の人の声は今ではただの騒音になってしまい、もやに溶け、真秀の体を完全に取りこんでゆく——。

Alice Kan